

子供の経験を階層的に生かす幼少連携カリキュラムの開発(1)

——「?!チャレンジ」科、及び「表現」科の単元開発——

朝倉 淳 井上 弥 石井 信孝 池田 明子 江本 繁子
岡野 佳子 岡本美充子 奥井 京子 金岡 美幸 下野 素文
中山 貴司 松島 英恵 見藤 孝二 横村 弥生 吉原健太郎

1 はじめに

幼稚園と小学校の連携の必要性は、1989年版「小学校学習指導要領」において生活科が創設されたことによって、より現実的なものになっている。最近では、幼少連携の実践研究も盛んである¹⁾。しかし、それらの多くは、幼と小の連絡会や交流学習の実施に留まっている。いわゆる小一問題やかかわり体験の不足などの今日的な教育課題に対応し、実質的に機能する幼少連携のためには、教育内容を柱とする連携が不可欠であろう。

本研究は、幼少連携研究の歴史を持つ広島大学附属三原幼稚園(以下、三原幼稚園)及び広島大学附属三原小学校(以下、三原小学校)での実践を事例として、幼稚園(3歳児から5歳児)と小学校低学年(第1学年から第3学年)の教育内容を子どもの経験の蓄積という観点から見直し、子どもの経験が階層的に生かされるカリキュラムとして提案することを目的とする²⁾。そのために、小学校教科の再構成を含む幼少連携カリキュラム(試案)を編成し、実践を通してその成果と課題を明らかにする。そして、カリキュラムを修正、改善した上で、幼少連携カリキュラムとして提案する。本小論では、カリキュラム(試案)の一部とそれに基づく実践について考察し、その効果と課題を示す。

2 子どもの経験を階層的に生かすカリキュラム

2.1 経験を階層的に生かすカリキュラムの編成原理

「経験を階層的に生かす」とは、子どもが、発達に適した体験、その時期に必要な体験を積み上げることであり、それが経験として後の学習に活用されるよう

にすることである。三原幼稚園・三原小学校(以下、三原学園)では、学園の信条、社会情勢、子どもの実態などから、小学校3年生段階でのめざす子どもの姿を「身のまわりのものや人に積極的にかかわり、自分でいろいろなことに取り組むことができる子ども」と設定している。これを目標概念として、子どもの経験を階層的に生かすカリキュラムを編成する。

本研究では、現行の教育課程を基礎に、小学校の生活科、音楽科、図画工作科、体育科を中心に考察して、カリキュラムの編成にあたる。本年度はその初年度として、次の3点をカリキュラムの編成原理とした。

- ① カリキュラムの範囲は、現行の教育課程に準ずるが、一部に新しい内容も含める。
- ② 対象とした教科の構成は、内容面ではなく機能面を重視して再構成する。
- ③ 内容の配列については、発達段階に応じて、その時期に必要な内容を置くとともに、内容の特性に応じて、繰り返し学べるようにする。また、幼稚園の年少から小学校第3学年までを範囲として、内容の系統を考察し、配列する。

2.2 小学校低学年の教科構成

小学校第1学年及び第2学年の教科構成を、「国語」「算数」「?!チャレンジ(はてななるほどチャレンジ、以下「チャレンジ」)」「表現」「体育」の5教科とすることとした。

「チャレンジ」科の設定理由は、次のとおりである。

「身のまわりのものや人に積極的にかかわり自分でいろいろなことに取り組む」には、そのきっかけとなる「驚き」や「不思議」が必要である。また、取り組みのエネルギーとなるようなおもしろさや楽しさ、喜びが必要である。さらには、このような取り組みの経

Atsushi Asakura, Wataru Inoue, Nobutaka Ishii, Akiko Ikeda, Shigeko Emoto, Yoshiko Okano, Fumiko Okamoto, Kyoko Okui, Miyuki Kaneoka, Motohumi Shimono, Takashi Nakayama, Hanae Matsushima, Koji Mitoh, Yayoi Yokomura, Kentaro Yoshihara: The Curriculum Development for Collaboration between Kindergarten and Elementary School from the Point of Children's Experiences(1) - The Development of New Units as the Subjects of "?! Challenge" and "Expression"

験としての達成感や成就感などが必要である。これらに結びつくかわりの内容や方法は、発達段階によって異なる。適切な体験が蓄積され、経験として階層的に生かされることが必要であろう。このような理念に基づき、特に認識の側面に焦点を当てた学習のまとまりとして、小学校第1・2学年に「チャレンジ」科を設定することにした。

一方、「表現」科は、「チャレンジ」科と同様の発想に基づきながら、表現の側面に焦点を当てたまとまりである。豊かな表現力の育成のためには、幼稚園・小学校低学年の時期に、多様な体験によって、受動的に、また能動的に諸感覚を十分に活用し磨くことが必要である。その際、諸感覚は、多くの場合、別々にはなく並行して総合的に活用される。そして、そこで得たものや想像したものは、いろいろな方法で表現される。このようなプロセスをふまえるならば、諸感覚を用いる活動や多様な表現活動を柔軟に構成することができるようなまとまりが適切であろう。そこで、音楽科、図画工作科と体育科の一部を同一の枠組み内に統合し、小学校低学年に「表現」科を設定した。これは、幼稚園での「総合的に子どもの力を育む」という教育理念を、小学校低学年に引き継ぐ意味も有する。

「チャレンジ」科、「表現」科の新設による、小学校第1学年から第3学年までの教科の構成は、図1のようになる。

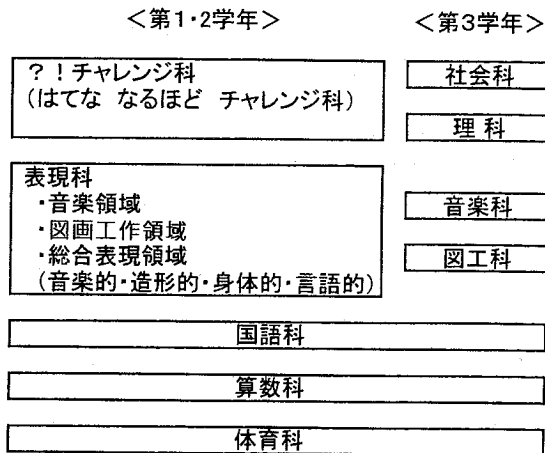


図1 小学校第1～3学年の教科構成

3 「チャレンジ」科における単元開発

3.1 「チャレンジ」科の目標

教科の目標を「身のまわりの自然や地域社会にかかわる体験活動を通して、それらに対する愛着を抱くとともに、自然や地域社会の事象の特性や関係に気づき、自ら活動を起こしたり見通しをもって行動したりするための実践力の基礎を養う。」と設定した。ここに示した「愛着」「気づき」「実践力」とは、次のような意味である。

身近な自然や地域社会への愛着とは、親しみを抱き、またそこへ行ってみたいとか大切にしたいという感情である。これは、子どもたちが直接繰り返しかわることによって育まれる。このようなかわりは、子どもたちの原体験となり、身近な自然や地域社会は原風景となるであろう³⁾。

ここでの気づきについては、認識の芽として捉えている⁴⁾。そして、気付くことが認識することの基礎的な力となると考える。したがって、認識の側面に焦点を当てた「チャレンジ」科の目標の達成のためには、気づきの生まれるような体験活動を構成することが前提となる。

実践力とは、自らの問題の解決や目的の実現に向けて、子どもたちが主体的に活動を進めていく力である。実践には、関係する知識や判断力、意志などが必要である。発達に応じて、実践する内容や程度は自ずと異なる。実践の仕方も、「とにかく行動を起こしてみる」というものから、「手順や結果に見通しをもって活動する」ものへと変容する。授業構成にあたっては、発達に即した実践になるような設定にすることが重要である。

3.2 「チャレンジ」科の教科内容

生活科の内容を基礎にして、教科内容を設定した。目標に即して軽重をつけるとともに、幼稚園での保育内容や小学校第3学年での教育内容を勘案し、「チャレンジ」科に「飼育・栽培」「遊び(物を使った遊び・自然を感じる遊び)」「公共」「仕事」の4つの領域を設定した⁵⁾。「飼育・栽培」では、小動物の飼育、花や野菜の栽培を行う。「遊び」では、身近にあるものを利用して物を製作したり、季節ごとの自然を感じる遊びを行ったりする。「公共」では、公共物や公共施設を利用したり調べたりする。「仕事」では、集団生活を営むために行っている仕事や世の中の仕事について、経験したり調べたりする。各領域において、学年別に、身近な自然や地域社会への愛着、認識の芽、実践力の3観点で内容を設定した。表1は、このうち「飼育・栽培」「公共」の2領域を示したものである⁶⁾。

表1 「チャレンジ科」学年別内容一覧表（部分）

(愛) 身近な自然や地域社会への愛着 (認) 一認識の芽 (実) 一実践力

領域	飼育・栽培	公 共
領域の目標	<p>(愛) 動物に愛着を抱けるようにするとともに生命を尊重する態度を養う。 ・動物を育てることに対する興味や、その方法に対する関心を抱くことができるようにする。 (認) 飼育栽培を通して、動物の変化や特性に気づくようにする。 ・動物の特性や、変化について言葉や文、絵などで表すことができるようにする。 (実) 飼育栽培活動において、目的を達成するための方法を見つけたり、自分なりの工夫を考えたりすることができるようにする。また、その方法をしっかりと学ぶことができるようにする。 ・動物について抱いた疑問について、様々な方法で探究することができるようにする。</p>	<p>(愛) 公共物や公共施設を大切に使うという気持ちを持つことができるようにする。 (認) 公共物や公共施設を調べる活動を通して、それらはいろいろな人たちによって支えられていることや、意味や働きがあることが分かるようにする。 ・公共物や公共施設について、考えたことや分かったことを言葉や文や絵で表すことができるようにする。 (実) 身のまわりにある公共物や公共施設の動きを自分なりに追究することができるようにする。</p>
対象	<p>飼育・・・昆虫、ウサギ、アヒル、カメ、カタツムリ、カエルなど 飼育・・・アサガオ、ミニトマト、稲、ヒマワリ、野菜各種</p>	園・学校、地域社会、公共物、公共施設
3年	<p>(愛) 観察する動物それぞれの特徴や生態の特性に興味を持ち、積極的ににかかわる。 (認) 比較して観察することによって、その動物や生き物独自の個性や、その仲間の共通点に気づく。 ・動物が生息する様子を観察することを通して、環境や季節の変化との関係に気づく。 ・動物の変化やその種類ごとの特徴、あるいは共通点について、その様子が分かるように詳しく記録することができる。 (実) 動物の変化や特性について探究する過程で、自分たちで共通の課題を設定し、その課題を解決するための方法を考え実行できる。</p>	<p>(愛) 私たちのまわりの安全を守っている人たちに感謝して生活することができる。 (認) 地域の安全を守っている施設や器具を調べることで、安全をどのように守っているのか、その努力や工夫がわかる。 ・地域の安全を守っている施設や器具の場所を調べ、その分布を地図に表し、考えることができる。 (実) 私たちのまわりの安全がどのように守られているか、調べてまとめることができる。</p>
2年	<p>(愛) 自分が育てようとする野菜に対して、それらにあった世話の仕方を考えて、継続的ににかかわることができる。 (認) 自分が選んだ野菜の育て方を調べたり聞いたりすることで、野菜には、それぞれ独自の栽培方法があることを知る。 ・種類が違ふ野菜の間違った育て方の様々な気づきを持つ。 ・野菜の種類ごとに、葉や茎、根や芽や実などにそれぞれ違いがあることに気づく。 ・野菜の様子を観察し、気づいたことを絵や文などを使って、様々なあらわし方をしたりして、その特徴を友だちに分かりやすく伝えることができる。 (実) 自分が選んだ野菜の育て方について自分で調べるができる。 ・栽培にかかわって、うまくいかない時はどうすればいいか、自分なりに考えることができる。</p>	<p>(愛) 身近にある公共物や公共施設を大切に使うことができる。 (認) 身近な公共物や公共施設の意味や働きがわかる。 ・身近にある公共物や公共施設の場所や様子調べ、簡単な地図に表すことで、その特徴や広がりがわかる。 (実) 身近にある公共物や公共施設はどんなものがあるのか、その意味や働きを自分なりに調べて、まとめることができる。</p>
1年	<p>(愛) みんなで育てようとする動物に対して、それらにあった世話の仕方を考えて、継続的ににかかわることができる。 (認) 身近な昆虫や生き物を飼育する活動を通して、動物が暮らしやすい環境について考えることができる。 ・身近な昆虫や生き物を飼育する活動を通して、自分たちが育てている動物について、一日の中での、あるいは時期ごとの変化について気づく。 ・育てている動物についてその特徴をよく見て、様々な気づきを持つことができる。 ・自分たちが育てている動物についてその特徴をよく見て、そのことを友だちに伝えたり、絵や文、立体造形などで表したりすることができる。 (実) 幼稚園の時の経験を生かして、自分たちの力で野菜を育てたり身近な生き物の世話をしたりすることができる。</p>	<p>(愛) 学校の道具や施設を大切に使うことができる。 (認) 学校について調べる活動を通して、学校で働く人や道具、施設の役割に気づく。 ・学校で働く人や道具、施設の場所や様子調べ、簡単な地図に表すことで、学校の様子がわかる。 (実) 学校で働く人や道具、施設の役割について、自分なりに調べてまとめることができる。</p>
年長	<p>(愛) 動物の世話をすることを通して、動物を大切に扱おうとする。 (認) 飼育栽培しながら動物の生長や特徴に気づく。 (例) 飼育動物の排泄も含めた動物の特徴 ・動物の特徴を見て発見したり疑問に思ったりしたことを友だちや保育者に言葉で伝えたり、絵で表したりする。 (実) 興味ある生き物について図鑑などで調べたり、当番活動などを通して身近な動物の世話を自分たちでしようたりする。</p>	<p>(愛) 幼稚園の道具や遊具はみんなのものだから大切に扱おうとする。 (認) 幼稚園の道具や遊具はみんなのものだということがわかる。 (実) みんなで道具や遊具をきちんと片付けたり、順番を守って使ったりすることができる。</p>
年中	<p>(愛) 身近な動物にかかわりながら直接触れたり世話をしたりすることを楽しむ。 (認) 身近な動物に直接触れながら、動物の生長や特徴に気づく。 (例) 飼育動物にふれあってみる動物の動きなどの特徴 ・動物の特徴を見て感動したことを友だちや保育者に言葉や動作で伝える。 (実) 身近な動物の世話を保育者と一緒にする。</p>	<p>(愛) 興味をもった幼稚園の道具や遊具にふれる中で大切に扱わなければならないことが分かるようになる。 (認) 幼稚園の道具や遊具はみんなのものだということが具体的な場面を通してわかる。 (実) 保育者に教えてもらったり友だちとかかわったりする中で幼稚園の道具や遊具をみんなで使おうとする。</p>
年少	<p>(愛) 身近な動物の様子を見たり、触れたりすることを楽しむ。 (認) 身近な動物の様子を見たり、触れたりする中で動物の特徴に気づく。 (例) 飼育動物の感触などの特徴 ・動物を見たり触れたりしながら気づいたことを保育者や友だちに身振り手振り伝える。 (実) 保育者が身近な動物に触れ、世話をしている様子を見たり、一緒にやろうたりする。</p>	<p>(愛) 幼稚園の道具や遊具の基本的な扱い方を保育者に教えてもらいながら分かるようになる。 (認) 幼稚園の道具や遊具は自分だけのものではないということが保育者に教えてもらったり、友だちとかかわったりしながら少しずつわかる。 (実) 友だちが使っているものに対して、ことわりを入れて使うことができる。</p>

3.3 単元「三原えきコンコース・安心してすごせるためのひみつつけたんけん」(小学校第2学年)

3.3.1 本単元の目標

「チャレンジ」科の単元目標は、教科目標の3観点を基礎に「愛着」「思考」「表現」「実践力」の4観点で示すこととした。「思考」「表現」については、気付きを広げたり深めたりするための考え方と表し方という点から目標を設定した。本単元の目標は、以下のとおりである。

(愛着) 施設・設備が、何のためにあるのか興味をもって直接自分で調べることができるようにする。

(思考) 比較することによって、同じ種類のものでも状況や目的に応じて形態や数などが違っていることから、施設・設備の役割について考えることができるようにする。

(表現) 比較したことを表にあらわすことで、何がどのように違うのか考えるには、表が効果的であることに気付くことができるようにする。また、地図を用いると施設・設備の位置や分布を示すのに効果的であることに気付くことができるようにする。

(実践力) 疑問に思ったことを自分で調べたり、尋ねたりするとともに、気付いたことをまとめることができるようにする。

3.3.2 本単元の構成

この単元は、「公共」の領域の内容を中心とするものである。本単元を14時間扱いとし、次のように構成した。

- 第1次 安心に役立っているものの予想 (1時間)
- 第2次 安心に役立っているものを探す探検 (2時間)
- 第3次 違いを比べて安心に役立つひみつを見つけ (3時間)
 - 1時 (階段とスロープの構造の違い)
(どんな人が安心して使えるか)
 - 2・3時(スロープがなぜ安心に役立つか)
- 第4次 一つひとつのひみつをくわしく探検 (各自が選択した施設・設備の見学) (2時間)
- 第5次 探検報告書作り (4時間)
- 第6次 探検報告書を読み合おう (2時間)

3.3.3 本単元における体験と生かされる経験

本単元における主な体験は、「駅を探検したり見学したりすること」「施設・設備の位置や分布を絵地図に表すこと」「報告書を作成すること」である。いずれも、2年生にならなければできない活動であるとともに、第3学年以降の学習に発展するものである。

探検・見学、絵地図への表現は、幼稚園や小学校第

1学年での体験が経験として生かされるものである。幼稚園にある道具、遊具の位置、意味、使い方などの体験が、より広い空間である学校、さらにはより社会的な空間である駅の学習における経験として生かされる。報告書の作成は、第1学年でのワークシートや科学研究の作成などが基礎となっている。

3.3.4 本単元での認識に関する考察

ここでは、施設・設備の学習を進めていく際、子どもたちが用いた考え方の傾向から、第3次までに学習したことがどのように生かされているかを考察する。

まず、日記(各自が選択した施設・設備の探検の日及び探検報告書づくりを行った日の2日分)と探検報告書に記述されている内容がどのような考え方によって導かれているかを分析し、分類・整理した。図2は、その結果を示したものである。

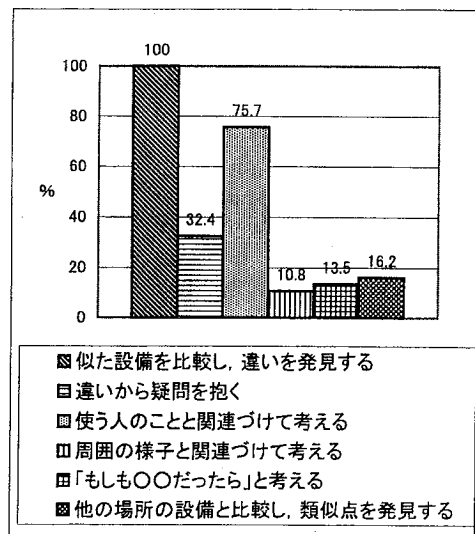


図2 第4・5次での子どもの考え方

図2及び記述の内容から、次のように考察した。

比較をして、色、形、数、大きさなど外観から分かる違いについては、全員が見つけることができている。75.7%の子どもたちは、施設・設備を使う人のことを想定して、考えることができている。これらのことから、第3次までに学習してきた「比較して考えること」「関連づけて考えること」が、個別の学習の中でもほぼ生かされていると考える。

違いから疑問を抱いていることについての、文章や絵の表現は、32.4%であるが、疑問をもとに探検活動

を行ったり、探検報告書で設備の構造の違いや位置、使う人などについてのクイズを作ったりしており、疑問をもとに活動を進めていると考えられる。

周囲の様子との関連付けでは、施設・設備がどのような場所に設置されているか理由を考えている。例えば、「消火器は火事の火元となりやすい場所に設置」「公衆電話は、行き帰りにかける人が多いだろうから出入りに設置」などである。

「もしも〇〇だったら」という考え方では、「もしも車椅子用のトイレがなかったら」「もしもゴミ箱が種類別になっていなかったら」「もしもコインロッカーが全部600円だったら」などと考えることで、施設・設備の役割を考えていた。

他の場所の施設・設備と類似点を見出している子どもは、車椅子用のトイレについて病院や大型スーパーを、火災報知器や公衆電話については学校を想起しており、他の公共施設との共通点を見出していると言える。

4 「表現」科の単元開発

4.1 「表現」科の目標

「表現」科の目標は、「さまざまな感覚を働かせながら感じ、イメージし、あらわすという一連の表現活動のプロセスを通して、表現する力の基礎を培う」と設定した。「表現」科では、「感じる」「イメージする」「あらわす」の過程を、図3のように捉えている。

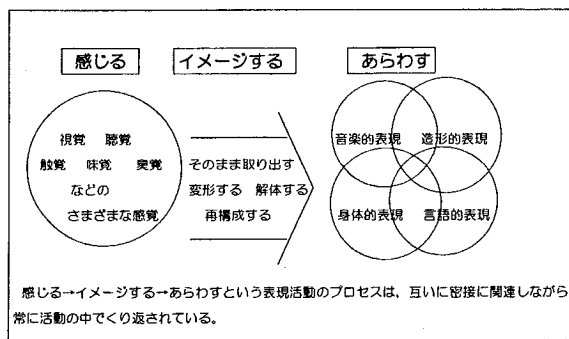


図3 表現のプロセス

4.2 「表現」科の教科内容

感じたことやイメージしたことを表現するための方法として「音」「色・形・質感」「動き」「言葉」をキーワードとして、「表現」科の内容を表2のように設定した。

表2 「表現」科の内容例

音 (例)	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな音質、抑揚、強弱、速度、リズム、メロディー、抑揚、強弱などを感じて楽しむ。 ・いろいろな音をもとに、ものや情景や気持ちなどを想像して楽しむ。 ・いろいろな音質、抑揚、強弱、速度、リズム、メロディー、抑揚、強弱などを歌や楽器であらわして楽しむ。 ・自分のあらわしたい音や気に入った音を探したりくったりして、音遊びを楽しむ。
色 ・ 形 ・ 質感 (例)	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な自然物や人工の材料の色や形、手触りなどを感じて楽しむ。 ・いろいろな色や形、手触りなどをもとに、ものや情景や気持ちなどを想像して楽しむ。 ・材料の形や色、質感などの組み合わせの感じや美しさや用途などを考え、道具の扱いに気をつけながら、あらわして楽しむ。
動き (例)	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな動きや体の使い方を感じて楽しむ。 ・動きや音楽から感じたことをもとに、ものや場面や気持ちなどを想像して楽しむ。 ・何かになりきったり、友達とかかわったり、調子を合わせたりして、身体を用いてあらわすことを楽しむ。
言葉 (例)	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな言葉の意味や、抑揚、強弱、速度などを感じて楽しむ。 ・言葉や抑揚、強弱、速度などから感じたことをもとに、気持ちや情景などを想像して楽しむ。 ・自分の体験や気持ち、想像したことなどを、いろいろな言葉を使ったり、抑揚、強弱、速度などを変化させたりして、あらわして楽しむ。 ・いろいろな言葉を組み合わせたり、新しい言葉を作ったりして、楽しむ。

※ これらの他に、わけ切れない総合的な表現として、

- ・場面や情景を、体全体で感じて楽しむ。
 - ・場面や情景を、具体的に、総合的に想像して楽しむ。
 - ・一つの気持ちや情景などを、いろいろな表現方法を用いてあらわして楽しむ。
 - ・音を動きであらわしたり、形を音であらわしたり、言葉を形であらわしたりなど、いろいろな表現をべつの形であらわして楽しむ。
- などが考えられる。

「表現」科では、豊かな表現力の育成のために意図的、計画的なかかわりを行う。そして、幼稚園との活動とつなげながら、最終的には小学校第3学年以降の音楽科・図画工作科・体育科・国語科といった教科の学習へ発展していく一連の過程の橋渡しとなるような学習内容にする。

4.3 単元「感じたことを表そう～ぼくたち私生活のおちばランド～」小学校第1学年

4.3.1 本単元の見どころ

秋には、園庭や校庭にたくさんの落ち葉や木の実などが見られる。このような身近な自然の素材を使って遊んだり、何かをつくったりすることによって、様々な色や形、質感、音などに触れることができる。感じたことやあらわすことの楽しさや充実感を味わいながら、より豊かに表現したいという意欲や実践力が高められていくであろう。

本単元では、「校庭のおちばランドを中心とした校庭で、季節を感じながら遊んだりつくったりする活動を通して、体験したことをもとに感じたことを友達と協力しながら様々な方法を組み合わせることで表現しようとする力を育む。」ことを目標とする。

4.3.2 本単元の構成

本単元の構成は、図4のとおりである。

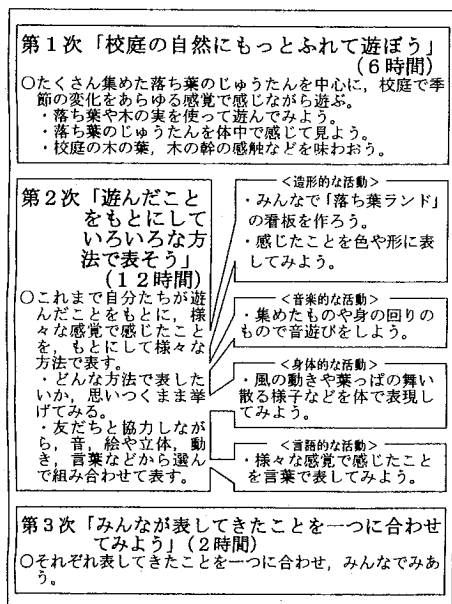


図4 本単元の構成 (活動計画)

4.3.3 本単元における体験と生かされる経験

本単元における中心的な体験は、自然物の感覚を十分に味わうことと、それを活用して遊んだり飾りやおも

ちゃをつくったりすることである。幼稚園においても同様の体験は必要であり、繰り返しが意味を持つ内容と言えよう。幼稚園では、素材の特性をそのまま楽しむことが中心であるが、小学校1年生になると、素材を活用することによって、より細かく具体的に素材の特性を把握することになる。

指導にあたっては、まず、素直に感じ、イメージしたことを自由な発想で開放的に表現できる場を設定する。その際、諸感覚を働かせるような意図的な働きかけを行う。また、様々な表現活動(音楽的・造形的・身体的・言語的など)に結びつくような材料を準備しておき、感じたことをそのまま言葉や音や絵や動きなどにあらわしやすようにする。

「音」「色・形・質感」「動き」「言葉」など様々な表現方法に出あった後に、自分なりに「おちばランド」や校庭での遊びから感じた表現方法を選択するようにする。一人ひとりが自分の心に問いかけ、じっくりと取り組むとともに、友達同士の自由な発想を認め合うことで、自信を持って自分なりの表現をすることにつながると思う。

4.3.3 本単元における表現の実際

第1次では、主に「おちばランド」で遊ぶ活動を通して五感をはじめとする様々な感覚を働かせてきた。「くすぐったい。」「気持ちいい。」「葉っぱの匂いが紅茶みたい。」「いや、桜餅の匂いがする。」など、感じたことがそのまま表現されている。

第2次では、まず、「どんなものが見えたか」「どんな音が聞こえたか」「どんな匂いがしたか」「どんな手触りがしたか」「体全体でどんな感じがしたか」など、遊んできたことを様々な感覚で振り返り、それらを色カードに書き留めるようにした。次の時間に、遊んだことをもとにどんな表現が考えられるかについても自由に発想し、色カードに記した。その後、遊んだことをどうあらわすかを次の5つで整理し、グループを編成した。

- 主に音であらわす。
(風や雨の音、きれいな音などを作る。)
- 主に動きであらわす。
(葉っぱや風の動きなどを身体表現であらわす。)
- 主に絵本であらわす。
- 主に絵や工作であらわす。
- 主に落ち葉のじゅうたんで遊んであらわす。

あらわす活動では、場所を広い特別教室に移し、1つのフロアでこれら5つの活動をそれぞれの子もたちが行った。違うグループの友達同士が互いに影響を与えあったり、同じグループ同士で意見を出し合いながら動きや音などをあらわしたりする姿が見られた。

一方で、自分たちの活動に没頭し、一人ひとりが楽しみながら活動している姿も見られた。

第3次では、お互いがどのようなあらし方をしてきたか見合った。友達のあらし方してきた活動に大変興味を持って聞いたり、見たり、一緒に体験したりすることができた。

5 カリキュラム(試案)による効果と課題

5.1 「チャレンジ」科における認識の芽

全員が比較することによって違いを見出したこと、多くの子どもたちが施設・設備とそれを利用する人のことを関連づけて考えたことは、気づきが認識へと深まる過程を示している。しかし、約25パーセントの子どもは、気づきが人との関連にいたっていない。その子どもたちも、活動の際の会話では、その施設・設備を使う人のことを考えた発言もあった。記述されていないということは、まだ十分には意識されていないと考えられる。

探検報告書の中に絵地図と表を利用した子どもが、それぞれ73%と21.6%見られた。位置や分布を示すために絵地図を使うと便利であることは多くの子どもたちが感じとったようである。比較の表については、今後も、繰り返し実際に表したり、読み取ったりする体験を重ねていくことが必要であると考えられる。

5.2 「表現」科における表現方法の多様性

「表現」科の授業ノートに記された授業感想を「あらし方」と「この時間でがんばること」の2つを時期ごとに整理したものが、表3である。子どもたちの表現は、動きによるもの(9)、音によるもの(6)、絵や工作物によるもの(17)、及び、動きから音に変化したもの(3)、その他(3)に分類できる。

まず、「動きによるもの」についてみていくと、表現の対象が「雨」「風」ないし「葉の落ちる様子」になっており、時期によって対象が変化していることがわかる。動き方、すなわち表現の仕方に関しては、「ほんもののような」「きれいな」などがみられる。次に、「音によるもの」についてみていくと、表現の対象には、「木の音」「天気音」「太鼓の音」「鈴の音」などの音の発生源と関係したものと、「かわいい音」「きれいな音」「大きな音」などの音の性質に関係したのものがある。音の出し方、すなわち表現の仕方に関しては、「ていねいに作る」「しっかり」などがみられる。「動きから音へ変化したもの」では、「木の音」「雷の音」「鈴の音」をあげている1例を除いて、単に「音」を表現の対象として記述しており、むしろ「きれいに」「合奏する」などの表現の仕方に関する記述

が特徴的にみられる。

上記のグループとは対照的に、「絵や工作物によるもの」では、絵や工作物によって表現される対象についての記述は少なく、むしろ「うまく」「きれいに」といった表現の仕方に関する記述が多くなっている。表現の方法に関しては「絵」「絵本」「本」「工作」が時期によって変化しているが、方法の違いが明確でないものが多く、いずれも「絵や工作物によるもの」で、方法が変化したとは解釈していない。

以上の特徴を整理すると、動きや音によってあらしそうとしたものは、絵や工作物によってあらしそうとしたものと比べ、何をどのようにあらしすかに注意を向けている可能性が示唆される。すなわち、表現方法が子どもの表現を限定する可能性が考えられる。この点で、単一の表現方法ではなく、複合した表現方法を前提にした「表現」科は有効な学習となると考えられる。

5.3 カリキュラム(試案)の課題

「表現」科、「チャレンジ」科の新設をして、単元開発に取り組むことができたが、今後両教科の関連、及び、他教科との関連などについても整理する必要がある。また、「表現」科、「チャレンジ」科以外に連携する必要性のあるものについて、吟味しなければならぬだろう。

年度途中からのカリキュラム編成、そして実施となったため、縦断的、あるいは横断的に整合していない部分、実践されていない部分が多く残されている。開発した単元が一定の効果あげる可能性が示唆されたものの、今の段階では、本カリキュラム(試案)が子どもの学びの全体に、どのように影響するかを結論付けることはできない。今後の課題である。

6 おわりに

幼小連携というと子どもの交流に注意がむく中、「チャレンジ」科、「表現」科を中心に教育内容の連携を考えることができた。小学校につながる幼稚園、幼稚園からつながる小学校という見方から、教職員がそれぞれの所属の教育内容について見つめ直すことができたことは一つの成果である。幼小連携の意味は、このような教職員の意識改革にもあるだろう。今年度は新教科の単元開発が中心となったが、今後、カリキュラムの修正を通して、子どもの経験を、幼稚園から小学校第1・2学年、さらに小学校第3学年へと整理し、それが階層的に生かされる実践を積み上げていきたい。

表3 授業感想から「あらわし方」と「この時間ではがんばること」の2つを整理したもの

	2 (12月2日)	3 (12月3日)	4 (12月5日)	5 (12月9日)					
動き	動きで	どんなものを作るか考える	動きで	雨のように動きたい	風の動きを	本当の風のように動く	雨を	きれいに動きたい	
	雨の動き	グループで、雨の音、雨の落ち方、雨の形を考える	雨の動き	雨の動きを、音と一緒にする	雨の動き	雨の動きをする	雨の動きをほんものに	雨の動きをする	
	雨の動きを	グループで動きを考える	風の動きを	風の動きをがんばる	風の動きを	風の動きをがんばる	葉っぱと風の動きを	友だちと葉っぱと風の動きをがんばる	
	葉っぱ	はっぱであらわす	風	かぜであらわす	風	かぜの動きをあらわす	風	かぜの動きをもっとじょうずにあらわす	
	葉っぱで遊ぶこと	はっぱで、どんな動き方を考えるか考える	雨の動き	雨の動き方を身体であらわす	風の動き	風の動き方をきれいに動く	風と雨	雨と風を身体であらわす	
	風の動き	グループで動きを考える	雨の動き	雨の動きをあらわす、いろんな動きをあらわす	動き	かぜと北かぜの動きをやりたい	雨の動き	雨の動きをあらわす、友だちと一緒にあらわす	
	葉っぱ	雨とはっぱをあわせて、いろいろあらわす	葉っぱが落ちるところ	いろいろなのはっぱの動きをがんばる	葉っぱのいろいろな動き	動きであらわす	動きをいろいろ	いろいろなのはっぱをがんばる	
	葉っぱの動き	みんなで話し合っ、はっぱやかぜやいろいろな動きを、発表できるようにあらわす	葉っぱの動き	ほんものはっぱのように、はっぱの動きをする	葉っぱの動き	いろいろな動きを考えて、する	葉っぱの動き	いろいろなのはっぱの動きを考えて、友だちとやりたい	
	動く	雨・風・落ちる葉っぱを動く、その前に決める	葉っぱの動き	雨・風と合わせる	しつかり動く	音と一緒に、しつかり動く	楽しく動く	思いっきり動く	
	動き・音	グループで動いて	はっぱのように動いて、はっぱのようになりたい	音を出す	がんばってやる	音	音を完成させたい	音を完成	音を完成させ、グループで合わせて、どんな音ができているか知りたい
風の動きを		しつかり風を見て、見たように動いて表す	音で	きれいな音であらわす	音で	きれいな音を出して合奏する	-	-	
風の動きを		どんな動きにするか考える	-	鈴の音を出す	木の音を	音の音を出す	木の音	木の音を出す	
音	木の絵のカードで	音を作る	木の音	いろいろな音を作る	木の音を	あの時の音を思い出す	木の音	楽しい音	
	風	風をどうやって作るか考える	きれいな音	きれいな音を考えて作る	かわいい音	かわいい音を考えながら作るようにする	かわいい音	かわいい音をうまくできるよにする	
	音を	音を観察する	音を	音をがんばる	音を	音をいっぱい作る	音を	音をいっぱい作る	
	動きながら音を	しつかり音を出したい	天気や音で	いろいろな天気の種類や音を作る	天気や音で	天気や音を出す練習をする	天気や音で	天気や音を出しながら楽しくやりたい	
	音で	いろいろな音をがんばる	かわいい音	もっといい音にしたい	音で	大きい音を出したい	音で	大きい音を出したい	
	音で	全部できるようにする	音で	ていねいに作る	音で	太鼓の音を作る	音で	鈴の音を作る	
	絵本で	いろいろなことをする	紙芝居で	いろいろ	絵本で	遊んだり、いろいろなことをする	本で	本を作りた	
	紙芝居で	どんな話にするか考える	紙芝居で	紙芝居を途中まで作る	紙芝居で	紙芝居であらわすのをがんばる	紙芝居で	全部仕上げ	
絵・工作物	折り紙で	どんな形を折るか考える	折り紙で	きれいに作る	折り紙で	友だちと協力して、仕上げ	工作	感じたことをしつかりあらわす	
	本で	本を長くしたい	絵本で	落ち葉を使っ	絵本で	絵本のシリーズを増やす	絵本で	色をきれいにぬ	
	紙芝居で遊んだこと	どんな話にするか考える	絵本で	いろいろなことをしたい	絵本で	いろいろなことをしたい	絵本で	いろいろなことをしたい	
	葉っぱで絵本を	どんな話にするか考える	絵本で	絵本をどんどん完成させる	絵本で	1冊目の絵本を完成させる	絵本で	絵本を完成させる	
	絵で	どんな絵にするか考える	本で	本であらわす	本で	紙芝居みたいな本を作る	本で	いろいろなきれいなものを作る	
	-	-	絵を	絵を描く	絵を描く	絵をもっときれいに描く	絵を描く	絵をもっときれいに描く	
	本で	絵を描いたり、いろいろなことをする	絵本で	字とかを書く	本で	色を塗	絵本で	丁寧に色を塗、字を書く	
	絵で	どんな絵にするか考える	本で	本であらわす	絵本で	かわいい落ち葉ランド	絵本で	色を仕上げる	
	絵で、遊んだこと	遊んだことを思い出	絵で	絵を丁寧に描く	絵で	絵を丁寧に描く	絵で	絵を完成させる	
	葉っぱで工作をする	どんな葉っぱを作るか考える	絵・工作で	絵をうまく描く	絵で	絵をうまく描く	絵で	絵をうまく描く	
	絵本で	きれいに	絵本で遊んだこと	小さい絵本を作る、絵をきれいに描く	絵本で	お話を詳しく	絵本で	きれいにする	
	葉っぱで工作をする	工作でがんばる	工作をする	工作をがんばる	葉っぱで工作をする	工作をがんばる	工作をする	工作をがんばる	
	折り紙を	折り紙をどうやって作るか考える	工作を	工作をがんばる	工作を	工作をがんばる	工作	工作が難しいところをあらわす	
	犬と猫を作っ遊ぶ	犬をどうやって作るか考える	工作を	工作をがんばる	工作を	工作をきれいに作る	工作を	もっときれいに作る	
	工作	工作をがんばる	-	絵をがんばる	工作	工作	-	-	
	その他	海の魚を	海の波をあらわす	ドングリゲームで	ドングリゴマを作りたい	キャッチボール	キャッチボールで野球をする	落ち葉合戦	落ち葉合戦を合戦みたいにしてやってみ
		落ち葉のこ	落ち葉で楽しいことをあらわす	ドングリゲームで	みんなで答えたらいいものに決まった	落ち葉の楽しいこと	いろいろな遊びをしながあらわす	落ち葉の雨	落ち葉の雨をもっとあらわしたい
落ち葉で遊んだこと		落ち葉で遊びたい	落ち葉ランドで楽しく遊ぶ	ドングリゴマで遊ぶ	落ち葉ランドでもっと遊ぶ	落ち葉でもっと遊びたい	落ち葉の雨	落ち葉の雨をもっとあらわしたい	
落ち葉で遊んで		感じて遊ぶ	ゲームで	ゲーム作りをがんばる	ドングリゲームを	ドングリを楽しむ	楽しく	遊んで感じる	

1 例えば、文部科学省においても、「就学前教育と小学校の連携に関する総合的調査研究」「幼・小連携に関する総合的調査研究」について都道府県を指定して研究が進められている。

2 三原幼稚園と三原小学校は同一敷地内にある。過去の幼小連携研究については、例えば、広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校研究会『研究紀要 一貫教育実践研究第1集』2000。

3 原体験、原風景については、例えば、寺本潔『感性が咲く生活科』大日本図書、1993。

4 宮本光雄『生活科の教育原理』、宮本光雄編著『生

活科の理論と実践』東洋館出版社、1990、p.13。

5 ここでいう領域とは、幼稚園教育要領に示されたいわゆる五領域とは別の概念である。

6 表内の第3学年の部分については、社会科・理科で扱われる内容に関して「チャレンジ」科と関連の深いものを取り上げ、「飼育・栽培」「遊び」「公共」「仕事」の4領域に位置づけている。

7 これらの言葉は、幼小で共通の視点を持つために、幼稚園教育要領の領域「表現」の内容(1)から「音・色・形・手ざわり・動き」を抜粋し、さらに「言葉」を加えたものである。小学校「表現」科では「手ざわり」を「質感」に置き換えている。